

彝族の詩人・吉狄馬加について

About Yizu Poet, Jidi Majia

渡 辺 新 一

要 旨

彝族の詩人吉狄馬加は一九六一年に四川省涼山彝族自治州で彝族の由緒ある家柄に生まれ、成都の西南民族学院で学んだ後、『初恋的歌』に収められる詩で文学界にデビューした。その詩は涼山の自然を詠う詩の他に、彝族であることの自己確認を果たすべく長く困難な道程を詠ったものである。吉狄馬加は青海省の宣伝部長を勤めたことがあるが、詩人としては彝族であることを抜きには考えられない。初期の代表作「自画像」では、家譜と民族の歴史をふまえ「わたしは「彝族」だ」と自己確認を宣言するが、後に書かれた「アイデンティティ」ではパレスチナの抵抗詩人であるマフムード・ダルウイーシュの「身分証明書」を思わせる内容で、自己確認の中に潜むことばのもんだいに触れ、さらに「引き裂かれた自我」では「名も知られぬ——涙にくれる動物だ！」と叫ぶにいたる。この深刻なもんだいはおそらく、詩人の中で、彝族の詩人であることと全世界の事象とを往還する道程があつて初めて可能となるにちがいない。著名な詩人緑原は「真の詩人」と吉狄馬加を評している。

キーワード

彝族、中国少数民族、吉狄馬加、アイデンティティ

吉狄馬加は彝族であることを自己の存在確認の根底において詩を書き始めた詩人である。

中国の文学界は、唐詩や宋詞の時代はもちろんのこと、傾向を同じにする詩人を一括りにして何々派、何々グループなどとよぶことがよくある。一九七六年の文革終焉後も同じであり、詩歌に限ってざっとみても、朦朧詩派、第三代詩派、他們詩群、大学生詩派、非非主義、知識分子写作詩群、民間写作……など枚挙に遑が無い。文学的な主張を宣言しその主張に沿った活動をした団体もあるが、派としてあるいはグループとして明確に自立した主張を掲げたわけではないものもある。また、複数の派に属していると思える詩人もいて、こうした括り方は時に便利ではあるがあまり有効性があるとは思えない。いずれにしても、時間の経過とともに現実の切実な課題と切り結ぶことが難しくなり、その活動が自然消滅のようになってきたものが多い。

吉狄馬加はこうしたグループのどこに属するか、またはどのグループに近いかを判断することは難しい。およそ、そうした考えでこの詩人を捉えようとするのはあまり意味のあることとは思えない。

吉狄馬加は一九六一年に四川省涼山彝族自治州で中国の少数民族である彝族の由緒ある家柄のもとに生まれた^①。彝族はかつて独立王国とまでいわれたこともあるほどの、独自の歴史と文化と文字を有する民族である^②。

吉狄馬加は今まで数冊の詩集を出しているが、処女詩集『初恋的歌』には代表作といわれる口語自由詩「自画像」がある。この詩の創作年度ははっきりしないが、二〇代前半までに書かれたこの詩は彝族である自分を省察し、家

譜と彝族の歴史を重ね、自分の生存の根拠は何かを語ったものである。その語りは詩人吉狄馬加のその後の作品世界を預言している。

自画像

風が夕暮れの丘の上でそつと子供に告げ、
風は立ち去り、遠方に風を待つ童話が生まれた。
子供よ、お前の名を留めなさい、この地の上に、
いつかお前はさつと誇り高い死をむかえるから。

——題記

わたしはこの土地の彝族の文字で書かれた歴史
断ち切れぬ女の臍帯の嬰児だ
苦痛に満ちたわたしの名前
美しいわたしの名前
希望に満ちたわたしの名前
それは一人の糸よりの女が
数千年来育んできた

一つの男の詩

伝説が生んだわたしの父親は

男の中の男

人々は父を支^チ呻^カ阿^ア魯^ルと呼ぶ

老いることのないわたしの母は

この地の歌い手

深い一条の川

わたしの永遠の恋人

美しい女の中の美しい人

人々は母を呻^カ瑪^マ阿^ア姐^ジと呼ぶ

わたしは一千回の死の

永遠に左に向いて眠る男だ

わたしは一千回の死の

永遠に右に向いて眠る男だ

わたしは一千回の葬儀のあとの

遠方から来た友情

わたしは一千回の葬儀が高潮したときの

母の喉から出た震える子音

すべてはわたしを包みこんではいるが

実はわたしは千年来の

正義と邪悪の戦いだ

実はわたしは千年来の

愛と夢の申し子だ

実はわたしは千年来の

終わらぬ一度だけの婚礼だ

実はわたしは千年来の

すべての反抗

すべての忠誠

すべての生

すべての死だ

おお、世界よ、わたしの回答を聞きたまえ

わたしは「彝族」だ

この詩は自己の存在理由をいくつもの設問の形で問いかけたその回答を、土地と民族、父と母、民族の時空と歴史の栄光と悲惨とを予期して書かれている。この詩にいう支呷阿魯とは彝族の神話にでる太陽を射る男で、彝族がもつとも崇拜する英雄の名であり、呷瑪阿姐は彝族の神話に出る若く美しい女性の名である。⁴冒頭の「わたしはこの土地の彝族の文字で書かれた歴史／断ち切れぬ女の臍帯の嬰兒だ」とは、とりもなおさず、詩人の出自に関わる運命の自覚である。人はだれも己の出自に関して何ら関与することができない。どのような父と母の、どのような家のもとに生まれるか、だけではない。どのような社会に、どのような国に生まれるか、あるいは人種、言語、性などには全く預かることができないまま、この世に生まれおちる。このことに関しては、人はみな等しく平等である。だが、その平等であることは生まれおちた世界の平等を意味しないから、自分が何ものであるかを絶えず問いかけることになる。このことにも例外はない。最終行の「わたしは『彝族だ』」は、一見して平凡などこにでもあることばである。彝族という語の替わりに、人はそれぞれ自己にとって固有の語を入れることができるだろうからだ。だが、この詩人にとってはあくまでも「彝族」であることではか語れないことを確認する詩句である。文革後の自立した個人の宣言でもある北島（本名：趙振開）の「回答」の詩句「世界よ、きみに告げよう／わたしは『信じない！』」を想起させるこの詩句は、北島が一個人として全世界に拒絶の意思を宣言しているとすれば、吉狄馬加は自己を規定している彝族としての一個人を世界に宣言しているといえよう。自分とは何ものか、自分が自分であることは何によって確認できるか、あるいは、もしそれが可能であるならその確認は何によって保証されるのか、その保証を確実にたらしめているのは何かといった、グルグルと回る永久運動的な思弁に囚われるのも無理からぬところである。

これは答のない問いなのかも知れない。

吉狄馬加の詩集の題名にもなっている口語自由詩「アイデンティティ」（原題「身份」）には、「マフムード・ダルウィーシユに」という副題がついている。吉狄馬加はパレスチナの抵抗詩人マフムード・ダルウィーシユ（一九四一—二〇〇八）に熱い共感を抱いていることがわかる。よく知られているように、一九四七年に国連総会でパレスチナ分割案が決議され、翌年にシオニズムによるイスラエルが建国された。その結果、多くのパレスチナ難民が生まれ、数次にわたる中東戦争がおこり、今にいたるもパレスチナの民族と宗教の複雑にからむ解放闘争が続いている。それと同時にパレスチナ人の抵抗運動が続けられており、マフムード・ダルウィーシユはその先頭に立った詩人である。彼は一九八八年に読み上げられた「パレスチナ独立宣言」の起草者でもあった。そのマフムード・ダルウィーシユに「身分証明書」という詩がある。アラビア語で書かれたダルウィーシユの詩は多く英語に訳されており、中国語訳もある。⁽⁵⁾いま、「身分証明書」の冒頭を引く。⁽⁶⁾

書きとめてくれ、

おれは アラブ人、

身分証明書番号は 五〇〇〇〇。

子供の数は 八人、

九番目が

この夏 生まれる。

気にさわったかね？

アラブ人を人とも思わない苛酷なイスラエル統治下のパレスチナ(7)にあつて、この「書きとめてくれ、／おれは アラブ人」ということは、パレスチナの土地と歴史を抜きには考えられない。この詩は「書きとめてくれ／おれはアラブ人」のリフレインを用いて石切場で働く己のことを語り、独立した個人の視線でパレスチナにおける抑圧と不正をしずかに熱く告発している。この詩を生んだのはパレスチナ固有の特殊性だが、その特殊を普遍たらしめているのは、人が人として生きるための最低限の条件を獲得しようとする強靱な意志と昇華された詩的言語そのものなのだと思ふ。

パレスチナのマフムード・ダルウィーシュと大涼山の吉狄馬加は、土地も歴史も全く異なっている。だが、「おれは アラブ人」と「わたしは彝族だ」の、自己の存在を自分で確認しようとする精神は通底している。

しかし、「自画像」で詠われた詩人の故郷である昭覚チヤオケユエ県の土地と歴史の中で宣言した自己確認、「千年来の／正義と邪悪の戦い」「千年来の／愛と夢の申し子」は、後に書かれた詩「アイデンティティ」では複雑に沈潜した調子に深化している。深化は普遍化に通じている。

アイデンティティを失った人がいるが

わたしは失っていない

わたしの名は吉狄馬加だ

わたしは一族の名を諳んじている

…吉狄…吉姆…吉日…阿伙…

…瓦史…各各…木体…牛牛…

それゆえ、わたしは信じている

「勒俄特依」は真実だと

ここまででは、彝族である自己のさらなる確認といえる。彝族独自のロロ文字でかかれた彝族創世記の史詩である「勒俄特依」という固有名詞を語って、強い意識で自己確認をしている。「勒俄特依」には、彝族の天地開闢から支格阿魯などの英雄譚や彝族の変遷が韻文で語られている。⁽⁸⁾ その後は以下の様に詠われる。

もちろん、ときにはわたしも恐怖にかられるときがある

なぜならそれはわたしの母語が

わたしの口元から離れおち

語素の葬礼が炎上しているようだから

そう、そうしたときはいつも

ダルウイーシュ、わが親愛なる兄弟よ

わたしは未だかつてない哀しみにしずむだろう

わたしは故郷を喪失した人びとのために

公平と正義を祈ったことがある

これは決して彼らが

生存するための大地を失ったためだけではなく

アイデンティティを失った漂泊者の

見守っているところの故郷が

すでに壊滅の状況にあるからだ

この詩の後半部分を、単にダルウイーシュに寄せる共感と同情と読むべきではない。吉狄馬加は「わたしの母語が／わたしの口元から離れおち／語素の葬礼が炎上している」とき、まさに「恐怖にかられる」のだ。これはとりもなおさず、吉狄馬加にとつての自己確認、アイデンティティは、母語と不可分のもんだいであり、「アイデンティティを失った漂泊者」は人類共通の普遍的なもんだいでもあることを探り当てた詩句と読むべきである。

おそらく同じもんだいを「焰とことば」ではつぎのように詠う。

わたしはことばを焰に投げ入れる

なぜなら焰だけが

わたしのことを自由にしてくれから

そうして初めてわたしの全てを

最後に焔に差し込ませることができるから

(中略)

不思議なのは、そうしたがたの中で

真実はすでに死にたえたが、時間は

別の神聖なところで流れていることだ

まちがいはなく、こうした夜があつて

初めてわたしはわたし自身となり

詩人吉狄馬加となり

初めてわたしは知る人のいない零通者になる

なぜならこの時刻に

わたしの舌先のことばと焔だけが

我が偉大な彝族の母語の深部に到達できるのだから！

「別の神聖なところで流れている」時間のそうした夜は、詩人のことばとことばを投げ入れた焔だけが「彝族の母語の深部に到達できる」。そのとき「初めてわたしはわたし自身となり／詩人吉狄馬加と」なるのである。ことば

が、ことばこそが、吉狄馬加にとって存在確認の手段、アイデンティティを保證することができるものだということになる。それでは、「そうした夜」の訪れないとき、つまり、ことばが自由になるために焔に投げ入れることができないうとき、詩人吉狄馬加は微妙な分裂を引き受けねばならないだろう。

この深刻なもんだいは、「引き裂かれた自我」において次のように率直に詠われている。

わたしは引き裂かれた自我に運命づけられている

選択を決意する前に

わたしの体内では——誕生と死が

すでに決死の肉弾戦を始めているから

で始まる詩は、分裂を引き受けざるをえない「誕生と死」をさらに次のように詠う。

わたしの左耳は

千年前の送魂の声を聴くことができる

事実は証明している——

左耳は時間の暴力を受けとめることができ

無形の両の手で

あの見ることでできない伝統と血脈を

素早く握ることができるし――

忘れられた語素を

あの冷たい灰燼の中から生き返らせることができる

だが、わたしの右耳は何も聴くことができない

鋼鉄の音が殺してしまったのだ！

彼はこのように自分の両耳が引き裂かれていることを詠ったあと、両目が引き裂かれたように焦点を結ばず、さらに口が言葉を発すれば世界は静寂で応じ、沈黙すれば世界は無数の諺で満ちる、という。そのとき、詩人は引き裂かれた自己を救出する術はなく、つまりは一時彝族であることも自己否定しなければならぬ。

わたしは永遠に――差違と衝突の中で踊っている

わたしはもう一人の吉狄馬加だ

わたしは一人の

あるいは――もう一人の

名も知られぬ――涙にくれる動物だ！

吉狄馬加は自分の依って立つアイデンティティについて、散文形式で別の角度から次のように率直に語っている。

わたしのアイデンティティは彝族であることであり、わたしは彝族の精神文化の一人のスポークスマンです。そしてわたしたち彝族は人類の一部分であり、この世界の一部分であって全部ではありません。わたしは彝族だ、とは、わたしは人類の一員であり、わたしの親族と歴史は我々の民族に属しているということです。わたしの希望は、東方の中国には現在も不断に生き続ける古い民族があり、その生活様式に基づき同じ場所でも断絶に労働をし、その生活習慣をまもって生活し、その言語を使って独自の文字を書き、同時に他の民族、たとえば漢族や他のすぐれた民族に学んでいるということ、すべての人びとに知ってもらいたいということです。⁽⁹⁾

アイデンティティとは、自分が何ものであるかを自分に語って聞かせる物語である。「(アイデンティティ)とは、それによってこの時この場所でも、あの時あの場所でも、過去でも未来でも、自分が同一人物だと感じるところのものである」⁽¹⁰⁾とするならば、詩人としての吉狄馬加は彝族であることを抜きにしては理解できない。

わたしの生まれる前に

もう存在していた

あるものがある

まるで空気や太陽のように

それは血液のなかを激しく流れている（目に見えぬ波動）

もし大涼山と我が民族がなければ

わたしという詩人はいない（「わたしに」）

また、吉狄馬加は自分の創作について次のように語っている。

わたしはなぜ詩を書くか、なぜならわたしは故郷の歌を耳にするだけで 涙が溢れでるからだ。わたしはなぜ詩を書くか、なぜなら彝族と赤・黄・黒の色に対して全く理解しない人がいるからだ。わたしはなぜ詩を書くか、なぜなら我が民族の祭司が彝族の歴史、故事、風俗、人情、天文、地理を講述してくれたからだ。^①

彼が自己存在の根底においている彝族にとって、黒は高貴と尊敬を意味している。彝族の自称である「諾蘇^{ヌオス}」とは「黒の民族」の意である。黒について特別な意識を語る詩篇は多い。

わたしは黒を夢に見た

黒のフェルトが高々と掲げられ

黒の神具が祖先の祭壇にまつられ

黒の英雄が天空に満ちる星と繋がる

だがわたしはきつと知っている

この甘美で哀しい種族が

いつから諸蘇と自ら名乗ったかを（「彝人が夢に見る色―ある民族が最もよく使う三種の色の印象について」）

ああ、黒い夢よ、わたしが消えるときは

どうかわたしのために哀しみと死の琴を奏でてくれ

吉狄馬加というこの痛苦の重苦しい名前を

深夜でも太陽の神秘的な色に染め上げておくれ（「黒い狂想曲」）

彝族であることの自己認識は、詩人の生まれた地と受け継いだ血とに深く結びついている。

この大地に横たわり

わたしはいつしか眠りにおちた

(お前のこの温かい

わたしのものである故郷

もつともこころ振るわせるメロディーよ

わたしはお前の夢のなかで眠る) (「沙洛河」)

こうした詩句は、詩人のこころが根づいている動かすことのできない根底的な事実を物語っている。

だが、彝族の詩人ということだけで吉狄馬加を理解しようとすると、途方もない迷路に入り込むことが避けられない。たしかに彼は彝族であるという自己認識を基底においた詩人だが、そうした自己認識はともすれば衆と寡、大と小、明と暗、正統と異端、中央と地方といった二項対立的なもんだいに収斂していく危険、つまり、二者択一的な結論に陥りがちであるからだ。つまり、引き裂かれた自我を意識して、自分の生きる世界に生起する(生起した)事象を捉えるためには、彝族であることを一時自己否定し、あるいはそれを包摂する視点が必要となろう。この詩人の詩を読むと、そうしたもんだいの所在を認識し、ともすれば情念や事実の描写が記号化して表面に露出するだけの危険に対して、独自の文学的な解決をはかろうとしていることがわかる。それは、涼山の厳しい自然を前にし、あるいは自己の依って立つ彝族特有の習慣や風俗に身を置いたときの述懐だけではなく、南アフリカのネルソン・マンデラを語り(「二十世紀を振り返って」)、フランス植民地のマルティニーク島生まれのエメ・セゼールに思いを寄せる(「我らの父の代」ときも、注意深く周到に準備されている)。

年老いた闘牛の心情を詠う「年老いた闘牛」や「死んだ闘牛」では、かつての栄光と現実の悲惨を対照させ、また「売りに出された獵犬」では獵犬に対する同情の一步手前に踏みとどまってリアルで非情な現実を描いている。闘牛や獵犬に対する距離の取り方、この詩人の対象に向かう視線は、農村の現実をリアルな筆で切り取った詩集『烙印』（一九三三年）で世に出た解放前の詩人臧克家（ツァンコトヤ一九〇五―二〇〇四）の詩的世界、たとえば「老馬」を思い出させる。個別の民族の固有性は、固有であればあるほど普遍的なものに連なるということでもある。吉狄馬加という詩人は、自身の馴染んだ彝族の生活や風俗習慣、大涼山の自然を詠う詩をものするとき、目の前の現実を忍耐強く凝視することにより、時間と空間を自在に移動する術の重要性に気づいたのではあるまいか。

トンボの黄金の羽は鳴り響く

太陽に輝く大空に

大地の山々に

男の額に

女の唇に

子供の耳元に

トンボの黄金の羽は鳴り響く

東へ

西へ

黄色人の耳元へ

黒人の耳元へ

白色人の耳元へ

長江と黄河の上流へ

ミシシッピ河の下流へ

これが彝族の昔からの音

彝族の魂からでる音だ（「口弦をつくる老人」の四）

こうしたイメージの跳躍は、涼山彝族自治州に生まれ育った詩人がやがて成都へ北京へ青海へと生活の拠点を移しながら獲得した思想のように、個別から普遍へ連なる道筋を確かな思想の核としている結果にちがいない。それは往々にして、一見直接的な内容の語句を並べることと完結するばあいがあり、その表現の直接性はときに危うさも内包しているように思えるときがある。たとえば、「振り返る鹿」では

一頭の鹿が狩人に追われ、逃れる術なく断崖に立った。

狩人が発砲しようとしたとき、鹿は突如振り返り美し

い娘に変わった。そして、狩人と娘は夫婦になった。

これは一つの

この世界に対する、すべての種族に対する啓示である

これは一つの美しい物語だ

願わくばこの物語がアフリカで

ボスニアで、ヘルテエゴビナで生まれてほしい

願わくばイスラエルで

パキスタンで生まれてほしい

陰謀と虐殺のあるいかなるところにも生まれてほしい

と詠う詩では、詩が詩でなくなる一步手前で踏みとどまっている。この詩のばあい、引用した本文の前に置かれた狩人と鹿の童話的な挿話によって、事前に象徴性が用意され、具体的な固有名詞が単なる固有名詞ではなくなる作用を果たしている。詩人の内部では彝族の詩人である自己から全世界に到る明瞭な道筋があり、さらに、全世界から彝族の詩人である自己に還流する道程もあって、それは何人も疑えないという自負があるからなのだろう。それは、「わたしは「彝族」だ」と告白したときに、意識するしなやかかわらさずでに用意されており、やがて、彝族であることの自己認識は人として普遍的なアイデンティティを確認する必要性へと深化し、引き裂かれている自我の救済のために還流する道程、往還の考えを導入したのだ。

わたしは知らない

エルサレムの聖書の

最終章には何が書かれているのか

けれどわたしは知っている

エルサレムという古い町は

希望と絶望のあいだで

一本の道だけが唯一の選択

——それは平和！

で終わるイスラエルの詩人イエフ・アミハイを詠う「希望と絶望の間で」や、

わたしは知らない

あなたが地球のどれほど遠い地に行ったかを

ただわたしは知っている

あなたはついにこの地に死んだことを

ではじまるチリの詩人パプロ・ネルーダを詠う「祖国」など、どれも彝族の詩人である吉狄馬加から全世界へ、そ

して同時に全世界から彝族の詩人吉狄馬加へと往還する詩の世界を形つくっている。その往還の過程は、中国の少数民族の詩人が globalization 時代における人間性を求める行為の必然の過程でもあるというべきである。

こうした姿勢の萌芽を処女詩集『初恋的歌』の諸編から早くも読み取り、詩の芸術性が詩人の個人的な切迫感によって失われ、詩の最も重要な想像力を己の親しんだ思惟のなかに滑り込ませてしまい、主題の先行を許しているという指摘がある。⁽¹²⁾一方で、代表的な詩集に『人の詩』がある著名な詩人の緑原^{リユエテン}（一九二二—二〇〇九）は、以下のように吉狄馬加を評している。

最も一般的なことこそもっとも特殊であり、最も平凡なことこそもっとも永久的であり、最も民族なことこそもっとも国際的である。（中略）その作品の深さと広さから見て、吉狄馬加は彝族に属しているだけでなく、中華民族に、さらに世界に属している。かれは中国語を用いて詩を書く人類の代弁者の一人である。かれは真の詩人なのだ。⁽¹³⁾

* 本論文は拙訳『アイデンティティ』（思潮社、二〇一八年）の「訳者解説」の一部を修正加筆したものである。

注

(1) 吉狄馬加の簡単な略歴を記す。

吉狄馬加は一九六一年六月二三日、四川省涼山彝族自治州の昭覺県で、彝族の父と彝族の母のあいだに生まれた。父母

(2) 彝族について

二〇一〇年に発表された中国の第六次人口センサスによれば、中国の人口は一三億四千万人余で、その九割以上が漢民族である。政府が認定した少数民族は五五あるが、彝族は少数民族のなかで六番目に多い八七一人人余を有する。その居住区は四川、雲南、貴州などの各省と広西壮族自治区にひろく分布している。彝族の歴史は古く遡ることができ、比摩とよばれる世襲の宗教的司祭を中心とした奴隸制に基づく強固な制度と習慣をもち、独自の彝語とロロ文字、それに曆をもっていた。二〇一七年一〇月二八日放送のNHKスーパープレミアム「長江文明を築いた悲劇の民族」では、現在大涼山の高地で暮らす彝族は一九八〇年代に四川省広漢市三星堆で発見された三星堆遺跡の古蜀王国の末裔であろうとする研究を紹介していた。歴代の中国王朝は、一時「独立ロロ王国」とさえよばれたこの少数民族の扱いに手を焼いている。一九四九年の中華人民共和国の成立以降も五〇年代半ばまで奴隸制を残していた。現在は少数民族の一つとして北京中央政府のもとにある。

(2) 彝族について

二〇一〇年に発表された中国の第六次人口センサスによれば、中国の人口は一三億四千万人余で、その九割以上が漢民族である。政府が認定した少数民族は五五あるが、彝族は少数民族のなかで六番目に多い八七一人人余を有する。その居住区は四川、雲南、貴州などの各省と広西壮族自治区にひろく分布している。彝族の歴史は古く遡ることができ、比摩とよばれる世襲の宗教的司祭を中心とした奴隸制に基づく強固な制度と習慣をもち、独自の彝語とロロ文字、それに曆をもっていた。二〇一七年一〇月二八日放送のNHKスーパープレミアム「長江文明を築いた悲劇の民族」では、現在大涼山の高地で暮らす彝族は一九八〇年代に四川省広漢市三星堆で発見された三星堆遺跡の古蜀王国の末裔であろうとする研究を紹介していた。歴代の中国王朝は、一時「独立ロロ王国」とさえよばれたこの少数民族の扱いに手を焼いている。一九四九年の中華人民共和国の成立以降も五〇年代半ばまで奴隸制を残していた。現在は少数民族の一つとして北京中央政府のもとにある。

(3) 吉狄馬加の作品(原文のまま、個人詩集に限る)には以下のものがある。

- 『初恋的歌』 四川民族出版社 一九八五年
 『一個彝人的夢想』 民族出版社 一九九〇年

- 『羅馬的太陽』 四川民族出版社 一九九二年
- 『吉狄馬加詩選』 四川文芸出版社 一九九二年
- 『遺忘的詞』 貴州人民出版社 一九九八年
- 『吉狄馬加短詩選』 香港銀河出版社 二〇〇三年（未見）
- 『吉狄馬加的詩』 四川文芸出版社 二〇〇四年
- 『時間』 雲南人民出版社 二〇〇六年
- 『吉狄馬加的詩与文』 人民文学出版社 二〇〇七年
- 『鷹翅与太陽』 作家出版社 二〇〇九年
- 『吉狄馬加的詩』（補充版） 四川文芸出版社 二〇一二年
- 『身份』 江蘇文芸出版社 二〇一三年
- 『詩歌集』 江蘇文芸出版社 二〇一三年
- 『火焰与詞語』 外語教学与研究出版社 二〇一三年
- 『我、雪豹』 外語教学与研究出版社 二〇一四年（未見）
- 『獻給媽媽的二十首十四行詩』 中国少年儿童出版社 二〇一七年（未見）
- 『從雪豹到馬雅可夫斯基』 長江文芸出版社 二〇一六年（未見）
- 吉狄馬加的詩集は、イタリア語、ブルガリア語、チェコ語、英語、ポーランド語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、韓国語、マケドニア語、フランス語など、その他多くの言語に訳出されている。
- (4) 彝族伝世經典編集委員會編『支呷阿魯（涼山彝族神話故事）』四川民族出版社 一九八二年。
- (5) ネット情報による。douban.com/note/4418962565 参照。
- (6) 土居大助訳『パレスチナ抵抗詩集Ⅱ』アラブ連邦駐日代表部、一九八三年、八頁。
- (7) アラブ連盟駐日代表部「マフムード・ダルウイーシユの詩」のことは、前掲『パレスチナ抵抗詩集Ⅱ』所収。
- (8) 馮元蔚『勒俄特依 彝族古典長詩』中国国際廣播出版社、二〇一六年。
- (9) 吉狄馬加「詩歌の停滞した時代に詩歌を高く掲げる」（吉狄馬加『土地と生命のために書く』青海人民出版社、二〇一一

- 年) 五七―五八頁。
- (10) R・D・レイン 『自己と他者』 志貴春彦・笠原嘉訳、みすず書房、一九七五年。
- (11) 吉狄馬加「ある種の声―わたしの創作談」(吉狄馬加『詩歌集』二〇一三年) 四〇五―四〇六頁。
- (12) 孫玉石「かき乱すべきではない蜜月―吉狄馬加の詩集『初恋的歌』を読んだの断想」(内蒙古師範大学・中国少数民族作家研究中心編『吉狄馬加研究專集 上卷』作家出版社、二〇一二年) 六〇―六二頁。
- (13) 緑原「吉狄馬加 一人の真正な詩人」(同前『吉狄馬加研究專集 中卷』) 五七二頁。